

あたまを耕すー5

29期生の皆さん、おひさしぶり。二学期になって一度も通信を書いていません(涙)。書きたいと思いつつ、時間を上手に工面することができませんでした。が、「四の五の言わずに、早く書け」と自分で自分に言います。

さて、二学期から哲学史という授業を始めました。哲学というと聞き慣れない科目なので、また授業中の説明では不十分なので、もう少し説明を加えたいと思います。

日本では、高等学校を卒業したら、いろいろな面で一人前の大人になります。だから小学校から高校までの間に一人前の社会人になるのに必要なことが教えられるように計画されています(それをカリキュラムという)。けれど高校までの勉強をすればそれで十分というわけではない。死ぬまで勉強(生涯学習)なのです。また、教えられる内容にも結構大きな不足があります。その欠陥の一つは、思想的な面、つまり哲学と宗教がほとんど教えられないことです。

たしかに、哲学は「倫理社会」という科目を勉強すればある程度の知識を得ますが、それでも受験のために「誰が何を言うたか。どんな本を書いたか」とかの暗記に重きが置かれ、「存在(在る)とは何か」とか「価値や目的や原因とはどういうことか」とかの哲学的な問題を考えることはほとんどしません。他方、宗教はというと、戦後の教育では「宗教的中立」という教義があり、公立学校では「道徳」で済ませざるを得ません(宗教なしに道徳が教えられるのかは疑問ですが)。また私立学校でも「宗教」は受験勉強には役に立たないという理由で軽視される向きがあるでしょう。でも哲学や宗教は本当に大切だと思います。今日はその説明をしたいと思います。

中学や高校で勉強する科目には、数学、英語、国語、理科、社会という5教科が中心です。このうち英語と国語は、言葉を学ぶ科目で、目的はその言葉を使って生活ができたり、学問ができたりすることです。だから、何かを作るための道具の使い方を覚えているようなものです。それに対して、数学や理科や社会は、いわゆる学問です。もちろん、中高のレベルでは、本当の学問というより入門のレベルなのですが、それぞれちゃんとした学ぶべき対象があります。例えば、数学は「数や図形」、理科は「物体や生物」、社会は「人間とその社会的活動」というふうに。言い換えると、これらの学問はこの世界にあるものの一部のものだけに焦点を絞って勉強するものです。だから、個別学問と言われます。それに対して、哲学は存在するものすべてを考えます。哲学の始まりは、古代ギリシアでタレスという人が「万物の根源(アルケー)は何か」という問を出したときに始まる、と先日話しました。つまり、ただ「生きている物」や「目に見える物」に限るのではなく、「万物」すなわち「存在しているすべてのもの」を考える対象にしたのです。



Thales
ターレス
自然哲学

「万物の根源は水である」

もう一つの哲学の特徴は、「根源」を追求する、つまり最も深い原因を探求することにあります。「どうして雨が降るの」と聞かれたら、「空気が高いところに上ると冷やされる。すると、その中にあった水蒸気が水になって空から落ちるからだ」というような答えををするでしょう。でもそう言えば、「どうして空気は高いところに上るの」と次の質問が来る。すると「それは地面が太陽の熱で暖められるから」と答える。しかし、その答えに対してもまた質問が来る。このようにしていくと、最後には、なぜ「ものは存在するの」という問に到達するでしょう。このような究極的な



問を考えていくのが哲学なのです。

数学では「数」を扱いますが、では「数って、何だろう」という問は数学では問題にしません。経済や法学は、人間の生活の営みの様々な面を考察しますが、では「人間って、何だろう」という問には答えません。あるいは、学問をするときや、日常生活の中では、「目的」やら「価値」やら「原因と結果」やら「関係」などなどの概念を何の気なしに使っていますが、「でも、目的（価値、原因と結果、関係）とはどういうこと」という問に答えようとするのが哲学なのです。

だから、言ってみれば、哲学はあらゆる学問の基礎なのです。歴史的には、古代ギリシアで生まれた哲学から、数学や物理学などが生まれたのです。

哲学は人生観や世界観とは違います。けれど、世界観や人生観は哲学の一部です。人は誰でも、自分なりの人生観や世界観、あるいは価値観を持っていて、無意識にか意識してか、それに従って生きています。だから、哲学は、人が「どういう生き方をするか」を決めてしまうものでもあります。ただし、どういう生き方をするかの点では、哲学より宗教の方がもっと強い力を持ちます。それゆえ、宗教もしっかり学ぶ事が大切なのです。

人間はその生き方によって大きく三つに分けられるかと思えます。第一の種族は、何も考えずに生きる、すなわち腹が減れば食べることを、疲れれば寝ることを、というふうな体の状態や欲求（マズローの言う生理的欲求）だけに従って生きることで満足している人。この人たちは、何も考えていないわけではなく（もしそうであれば、動物と同じですから）、ただ何かその場その場の都合や利害や好みに従って生きればよいという人生観に従って生きているわけです。

第二の種族は、「善を行い、悪を避けよ」という良心の声に従って生きようとしているが、これと言って大きな目標や理想を持ちません。つまり、よき市民として生活するのですが、平和な日常生活ができる以上のことを望みません。

これに対して第三の種族は「人はこう生きるべきだ、社会はこうあるべきだ」というような人間や社会に関するはっきりした考え（理想）をもって行動する人がいます。この種の人々は少数派ですが、この人々が社会をリードする、つまり第一と第二の種類の人々を引っ張っていくのです。

この人たちが社会を変えるのです。しかし間違った思想なら、人と社会を破滅に追いやることもある。それゆえ、しっかりしたものの考えを身につけることが、社会の中でしっかりと生きていくため、よい社会を作るために必要で、そのためにものの考え方を教える哲学を学ぶことは意味があると叫びたいのですが、それを十分に教えられないのが歯がゆいのです。だから、せめてこういう形で、通信を書こうと思っているのです。

以前大学で働いていたとき、就職難の時代（氷河期と言われていました）だったので、大手の保険会社の人事部で働いていた友人に「会社って、どんな人材を求めているの」と尋ねたことがあります。彼は「別に即戦力など期待してへん。仕事の仕方は会社に入ってから教えるからな。ただ、幅広い教養と、コミュニケーション能力をつけてる学生やな」と答えてくれました。つまり、職場で仲間と一緒にやっていくことができ、仕事以外のいろんな話ができる人、とも言い換えることができるでしょうか。哲学とキリスト教の知識は、幅広い教養の重要な部分です。この通信がそのためにも少し役立てばと思います。

2015年10月28日、尾崎